

## 選択と捨象の時代

私が主宰している「経営いろは塾」は、第一期が終了して現在は二期生が参加しています。二期生のなかには一期より継続して参加しているメンバーも数人おります。

その内のお一人の方の話で、この塾で初めて出会い、それを機に公私共に仲良くなっておつきあいが続いているとのことで、この塾の開講の目的の一つは、仲間づくりですので、相互に刺激あい切磋琢磨が成されていることを知り嬉しく感じました。

さて、6月と8月のその「経営いろは塾」の講義でふれていますが、昨今の時事問題として東芝の不適切会計について、このようなことは中小企業経営といえども、けして例外ではないと、日頃から伝えて来ていて「経営は人々が行う、あるいは起こしやすい営み、即ち営為（えいゐ）であること」で、事業経営の難しさ、厳しさを改めて再認識させられております。

不適切会計について

1) 事業会社 2) 代表者 3) コーポレートガバナンス（企業統治）  
4) 社外取締役 5) 監査法人（新日本有限責任監査法人）など、名はあれど本来の機能の責任を全うできてない状況があからさまになり、結局不名誉な現実と直面しているわけです。

8月27日の日経新聞に、9月に社外取締役に就任するK氏が、不適切会計の原因の一つに「利益の出ない事業を無理に続けようとしたことにある」と断言し、その再生には「事業の整理が必要」とありました。

最近目を通した本に **選択と捨象**（朝日新聞出版刊「会社の寿命10年」時代の企業進化論 経営共創基盤（IGPI）富山和彦著）があります。

捨象（しゃしょう）とは簡単に言えば「捨てていくこと」です。かつて云われて来て、私もしばし口にして来ましたのは「選択と集中」でした。

本誌では、もうこれからの経営環境下の事業経営を考えると、従来のように生ぬるい選択と集中ではなく、結論として捨象だとしているのだとしております。集中などの生存手段は通用しないことだ、経営者は強い意志と決断が求められています。

政府の産業再生機構のCOOを2003年から4年間務めて、カネボウ、ダイエー等の事業再生経験を基にした書籍でしたが、こんにちの東芝の不適切会計に思いを馳せるとき、事業に携わる私たち人間の営為は昔も今も変わらないのだと痛感させられました。

また私達の生活のなかで「断捨離」と云う言葉がありますが、事業経営において「捨て去ること」の意味あいは、企業生命もかわることですので心して臨んでいくべきと思っています。